

オープン・ビルディングを提唱

寄稿

N. J. ハブラーケンMIT名誉教授を偲んで

芝浦工業大学名誉教授 南 一誠

マサチューセッツ工科大学（MIT）名誉教授のニコラス・ジョン・ハブラーケン氏が10月21日、オランダ、アペルドールンの高齢者施設で逝去された。教授は1928年10月29日、インドネシア・バンドン生まれのオランダ人であり、95歳の誕生日を迎えられる直前のことであった。MITを退職され、母国オランダに戻られてからも、講演や執筆など元気に活躍されていたが、半年ほど前から体調を崩されていた。告別式は10月28日、アペルドールン郊外の葬祭場で執り行われ、インターネットでも配信された。長女のジュリーさんによると、10月18日、スープとデザートを差し上げた後、体調が悪くなられたとのこと。ベッド横のテーブルに大きなアトラス（世界地図）が開いてあったので、片付けようとしたところ、開いたままにしておくようにと言われた。その後、意識をなくされ、それが最後の言葉になったという。ナイトテーブルの上にはポンペイに関する本が置かれていた。最期までご覧になっていたアトラスが棺の上に開いた状態で置かれていた。ジュリーさんは、ギリシャの詩人カヴァフィスの詩『Ithaca』を読み、式を締めくくった。高い志を持って目的地に向かう長い旅路を詠ったこの詩は、信念を持って都市、建築の真実を生涯、探究した教授にふさわしいものであった。

教授はインドネシアで過ごした子どもの頃、アムステルダム派の建築の本を見たのがきっかけとなり、将来はオランダに行き建築家になりたいと考えていた。学校が休みの時にはカンポンを歩き回り、そこでの生活がとても清潔で、秩序だったものであることを発見している。48年から55年までデルフト工科大学で建築を学んだ。イタリア各地を巡る視察旅行を学生

居住者主体の住まいを探求



大阪ガス実験住宅NEX T21（写真提供・大阪ガス）

代表として運営したが、その頃から都市を形成する構造（Urban Fabric、Field）に関心を持っていた。戦後復興の過程で建設されたマスハウジングに違和感を持ち、居住者は住宅の計画プロセスに参加すべきで、そのことが建築や居住環境を豊かなものにすると考えていた。

大学卒業後はオランダ空軍施設部に勤務、58年からデルフト工科大学建築学部のインテリア設計担当の講師を務めた。61年、『サポート、マスハウジングに替わるもの』を出版し、住宅の設計・建設におけるサポートとインフィルの分離について述べ、住宅生産の主体は居住者であると主張、併せて住宅産業の未来について提言した。62年からLucas & Niemeyer建築事務所に勤務し、65年から75年まで民間の建築研究所S A R（Stitching Architecten Research）

の初代所長として、都市・建築の研究に携わった。67年、アイントホーヘン工科大学に創設された建築学部の初代学部長に就任。75年、マサチューセッツ工科大学の教授となり、89年に退職するまで教育、研究に従事した。

教授の主張に共感した建築家や大学関係者たちがC I B（建築研究国際協議会）にワーキング・コミッションW104 Open Building Implementation（オープンビルディングの推進）を設置し、この四半世紀、国際的な広がりをもって研究と社会実装が進められてきた。オランダの建築家フランス・ファン・デル・ヴェルフさん、フィンランドの建築家ピア・イロネンさんなど、世界各地に教授の考えに基づき集合住宅を設計した建築家がいる。教授はインフィル産業の発展に強い関心をお持ちで、マツーラ・システムと呼ぶイ



ンフィルシステムの開発には、自ら関わられた。教授は日本の大学関係者や建築家とも長く交流され、その理論はK E P（Kodan Experimental housing Project）、C H S（センチュリーハウジングシステム）、K S I（公団型スケルトンインフィル）や大阪ガスの実験住宅NEX T21などに影響を与えてきた。日本の「長期優良住宅の普及の促進に関する法律」を、時間の観念を取り入れた住宅に関する世界初の法令だと評価されていた。

教授の考え方は、その著書に整理してまとめられている。主な著書として、『The Structure of the Ordinary』（1998年）、『Palladio's Children』（2005年）、『Conversations With Form: A Workbook for Students of Architecture』（14年）、『The Short Works of John Habraken: Ways of Seeing/Ways of Doing』（23年）がある。ハブラーケン教授は、95年近い生涯において、終始一貫、都市・建築の本質を追求し、居住者の主体性や建築家の役割について考えを深めてこられた。教授が旅立たれたこれからは、教授が書き残された論文を通して、私たちもその考えの本質的な意義を考え続けることにしたい。

日本の建築家とも交流、大きな影響

